

Wolfgang Jost : 著, 梶 龍児 : 監訳

ボツリヌス療法アトラス

書評者

有村公良 (大勝病院院長)

●実地で手元に置いて利用できる実用的な教科書

日本のボツリヌス治療の草分けであり、第一人者である徳島大学臨床神経科学分野教授の梶龍児先生の監訳による『ボツリヌス療法アトラス』が発刊された。ボツリヌス療法の実地臨床に役立つ待望の書の登場である。

これまで数多くのボツリヌス療法の解説書が出版されたが、その内容は対象疾患の解説、ボツリヌストキシンの作用機序・投与方法・効果、および予後まで幅広くボツリヌス療法に対する基礎知識を述べたものが中心であった。本書の特徴は『ボツリヌス療法アトラス』というその名の通り、ボツリヌス療法を行う実地の場で、手元に置きながら利用できる、まさに実用的な教科書である。

ボツリヌス療法は1997年眼瞼痙攣が保険適応になって以来、片側顔面痙攣、痙攣性斜頸、小児の脳性麻痺と徐々に適応が拡大し、2010年10月からは脳卒中後遺症を含む上下肢痙攣への適応が認められ、その対象患者数は飛躍的に多くなった。本書の序章に梶先生が書いておられるように、ボツリヌス療法は治療する医師にとって、治療の適応の決定、治療する筋の選択、投与量の決定など多くの知識と経験を要する治療法である。本来なら熟練した医師の指導下で十分な経験を積むことが望ましいのだが、わが国には経験豊富な医師はさほど多くはなく、また専門

のトレーニングを受けることができる施設の数も少ないのが現状である。本アトラスはその手助けとなる実用書といえる。

ボツリヌス療法を適切にかつ効果的に行うためには、いくつかのポイントがある。

まず臨床や神経生理学的に治療の対象となる筋を同定することから始まる。その次にその対象となる筋へ正確にボツリヌストキシンを投与することが重要である。そのためには、(1)対象筋の解剖学的な位置と神経筋接合部が豊富な筋腹を同定する、(2)可能な限り筋電図、電気刺激、超音波で注射針の刺入部位を確認することが重要となる。『ボツリヌス療法アトラス』では、これらの点についてかゆいところに手が届くがごとく、詳細に解説されている。

まず筋の解剖図が非常にきれいで、筋の走行や周囲の組織との関連がよくわかる。その図に注射針刺入部位の指標が示されており、極めて実地的である。また同時にほとんどの筋で注射部位の断面図があり、三次元的に対象筋の同定や周囲の神経・血管との関係が一目でわかるようになっている。それぞれの図には対象筋の作用、注射時の注意点、実際の注射位置・方法が記載されており、経験者でも改めて確認できるようになっている。もう一つの本書の特徴は、いくつかの重要な前腕の筋で超音波図が載せられていることで

ある。最近安全かつ確実に注射するために超音波を用いる術者も増えており参考になる。以上のようにボツリヌス療法を行う際に重要な対象筋の同定は、本アトラスを確実に理解することではほぼ解決できると思われる。

次に重要なことは投与量の設定である。この点についてもすべての筋について投与量の目安が記載されておりわかりやすい。この投与量の目安をもとに、治療対象者の年齢、筋のボリューム、不随意運動の強さなどから、施注者が量を決定することになる。本書ではボツリヌストキシンとして、わが国で認可されているボトックス®のほか、欧米で認可されているほかの2種類の薬剤についてもその投与量が記載されている。将来これらの薬剤がわが国に入ってきた場合でも対応できる。また、本アトラスは保険適用になっている四肢筋群、頸部筋群、顔面筋群のみならず、現在のところ保険適用疾患の対象となっていない骨盤底筋、自律神経系の記載もあり、臨床研究にも応用可能となっている。

ボツリヌス療法を行う際にはぜひともそばに置いておきたい実用書であり、推奨する1冊である。

A4 頁272 2012年 医学書院刊
定価18,900円(本体18,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-01520-2]



お知らせ

弊誌は第31巻8号より和文略称、欧文略称とも「No Shinkei Geka」に統一いたしました。今後引用の際には、表記を「No Shinkei Geka」として下さい。

「脳神経外科」編集室